

祖形 *-ga, *-ti, *-ma の日本語反映形 (前編)

近藤 健二

アジア太平洋諸語は一つの系統樹を構成する。筆者のこの想定は、アジア太平洋諸語が幾千もの言語に分岐する前段階、すなわちアジア太平洋祖語に、*-ga と *-ti と *-ma という格標識が存在したことを前提にしている。こういう前提に立ち、筆者は拙論 (2003a, 2003b) において、シナ・チベット語族のチベット・ビルマ語派、南太平洋地域のオーストロネシア語族、ニューギニア島のパプア諸語、オーストラリア大陸のオーストラリア原住民諸語における人称・格標識が北方の諸言語におけるのと同様に *-ga, *-ti, *-ma から成ったものであることを指摘した。

本稿では、日本語を考察の中心に据え、かつての格標識 *-ga, *-ti, *-ma の反映形と見なされるさまざまな形態が日本語の中でどのような機能を獲得しているかを、周辺諸言語との比較考察を通じて明らかにする。そして、日本語が系統的にアジア太平洋諸語の紛れもない一員であることを確認する。

1 副詞・連用形接辞

具格接辞の本来の働きは、名詞・代名詞に付属して道具・手段を表す副詞的修飾語をつくることである。しかしこの機能は、いろいろな言語において副詞を形成する機能に発達した。たとえばアイヌ語では、具格接辞 *-ga に由来する -no (< *-ŋa < *-nga < *-ga) が、wen 「悪い」 wen-no 「悪く」のように形容詞・動詞を副詞に換える働きをする。ビルマ語でも *-ga が弱化して生まれた ?- が、myan- 「速い」 ?-myan 「速く」のように、形容詞を副詞に変換する。またビルマ語には、lwê- 「はずれる」 t-lwê 「まちがって」のように、t- が動詞を副詞に換える働きをするが、この t- は具格接辞 *-ti の反映形であると見なされる。

日本語にも具格接辞に遡る副詞形成辞が存在する。*-ti の反映形と考えられる

-to がその一つである。

- (1) しなだゆふ ^{ささなみち} 佐佐那美路を すくすくと ^{わい} 我が行ませばや (『古事記』
歌謡 42)
- (2) かみは、あふぎをひろげたるやうにゆらゆらとして (『源氏物語』若紫)

このような様態副詞をつくる -to は古くは「~として」「~となって」「~のように」という意味でもふつうに用いられたが、-to のこの用法は今ではごく限られた言い回しにしか見られない。

- (3) やすみし ^{わ おおきみ たかひか} 我が大君 高光る 日のみ子 ^{あめ みや} ひさかたの 天の宮に
^{かむ} 神ながら ^{かみ} 神といませば …… (『万葉集』204)
- (4) ^{そのふ ももき} み園生の百木の梅の散る花の天に ^{あめ} 飛びあがり雪と降りけむ (同 3906)

-to の副詞形成辞としての発達は様態副詞をつくることだけにとどまらなかった。「~と言う」「~と呼ぶ」などの表現における -to, 「~と遊ぶ」「~と一緒に行く」におけるような共同行為者を表す -to, そしてまた「太郎と次郎」におけるような -to, さらには「~となる」「~と化す」などにおける -to も、具格接辞 *-ti の流れをくむものである。ちなみに、*-ti は多くの言語で -i という形にもなっているが、たとえば満州語では -i が具格接辞として機能するのは別に、日本語の -to に相当する意味でも用いられる。

- (5) tere alin i ninggn de tamun i gebungge omo bi
その 山 の 上 に 門 と 名付くる 池 あり
(『満州実録』1.4)
- (6) tere dobori nikan wailan i emgi burulaha (同 1.131)
その 後 尼堪 外蘭 と ともに 逃げし

副詞を形成する接辞には、-to 以外に -ku と -ni がある。-ku は *-ga に由来するものであり、形容詞の連用形を構成する。一方、-ni はおそらく *-ga と *-ti の反映形が合体したものであり、いわゆる形容動詞の連用形接辞と同一、または同類である。なお、-ku は文語あるいは各地の方言において k が脱落して -u となるのが稀しくない。

- (7) ^{むらさき}紫草の^{いも}に^{にく}ほへる^{いとつま}妹を^{われ}憎く^{あらば}あ^{らば}らば^{ひとつま}人妻^{ゆゑ}ゆゑに^{われ}我^{こせ}恋^{はるの}ひめ^{やも}やも (『万葉集』21)
- (8) ^{かわがみ}川上の^{つばき}つらつら^{こせ}に見^{はるの}れども^{はるの}飽^{はるの}かず^{はるの}古瀬^{はるの}の^{はるの}春野^{はるの}は (同 56)

拙論 (2002) で論じたように動詞の連用形接辞 *-i* も具格接辞に由来するものであるから、連用形と称せられるものはすべて具格接辞に起源を有するということになる。このことは、動詞・形容詞・形容動詞の連用形に付属する *-te* にもあてはまる。*-te* は完了を表す助動詞 *-tu*¹ の連用形であるとされているが、これは古代チュルク語の *ädgü-ti* 「よく」や *qatıy-dī* 「かたく」のような様態副詞における *-ti*, *-tī*, *-di*, *-dī* と同様に具格接辞 **-ti* を引き継いだものである。すなわち *-te* は、動詞の連用形接辞 *-i*, 形容詞の連用形接辞 *-ku* (または *-u*), 形容動詞の連用形接辞 *-ni* に付加して、その連用形としての機能を一層明確に示そうとしたものである。その意味では、*-te* 形も一種の連用形と見なすべきものである。なお、「かつぐ」や「さわぐ」のように語尾が *-gu* となる動詞の場合、古代語で「かつぎて」「さわぎて」のように *-te* であったものが現代語では「かついで」「さわいで」のように *-de* となっている。一方、形容動詞の場合にも現代語では「静かだ」「すこやかだ」のように *-de* という接辞が現れるが、これは「静かにて」「すこやかにて」のように古代語で *-nite* であったものが縮まったものである。

- (9) ^も燃ゆる^も火も^{ふくろ}取りて^い包みて^{おもし}袋には^{おもし}入ると^{おもし}言はず^{おもし}や^{おもし}面^{おもし}知る^{おもし}なく^{おもし}も (『万葉集』160)
- (10) ^みそれを見れば、^み三寸^みばかり^みなる^み人、^みいと^みうつく^みしう^みて^みあたり。(『竹取物語』)
- (11) ^み七日、^み雪まの^みわか^みな^みつ^みみ、^みあ^みを^みやか^みにて、^みれい^みは^みさ^みし^みは^みさ^みる^みもの^み自^みち^みか^みら^みぬ^み所^みに、^みも^みて^みさ^みは^みぎ^みた^みる^みこ^みそ^みお^みか^みし^みけれ。(『枕草子』2段)

このように具格接辞に由来する形態が副詞節を構成するのは日本語においてだけではない。また、このような副詞節を構成するのは **-ti* の反映形だけではない

¹ タ行音は、今日では [ta] [ti] [tsu] [te] [to] となっているが、鎌倉時代には [ta] [ti] [tu] [te] [to] であったことが知られている。上代においてもこのような音であったと推定される。

い。たとえば、アイヌ語には *-ga に由来する -wa (<*-φa<*-xa<*-?a<*-ya<*-ga) があって、これが日本語の -te に相当する役割を果たす。北海道東部方言では -tek, 樺太方言では -teh という接辞も -wa と同じ働きをするが、これらは *-ti の反映形 -te と *-ga の反映形 -k, あるいはそれが弱化した -h とが合わさったものであろう。樺太方言ではまた, *-ga の反映形が二つ重なってできたと考えられる -koh が -teh とほとんど同じ意味を表す。樺太方言ではさらに、存在動詞 'an 「ある・いる」に -i (<*-ti) が付いてできた -'ani が yoomah-'ani kahkawe 「槍で突く」のように具格接辞として用いられる一方で、-teh や -koh が導くのと同一種類の副詞節を導く。

(12) neya kačoho taa-wa san tusu-wa san nani san-teh
 その 太鼓を 叩いて 今 神祈りをして 下り すぐ 下って
 wahka kaata repun (藤山ハルの語り『わしの羽の話』)
 海の 沖へ 出た

(13) cusa'an kamuy kam kayki humpe rikaa kayki wen poro
 いろいろな 獣の 肉 も 鯨の 自身 も でっかい
 rikaa reekoh kusu ne'an ruwesanihč'in 'ohta yan-koh 'otakaata
 自身が それこそ その 浜の道 に 上がる-と 浜に
 sapa-hči-koh 'uka-hči-koh 'ampa makapa-hci-koh 'e-hcii
 下っ-3 複-て 取っ-3 複-て 持ち 帰っ-3 複-て 食べた-3 複
 (同『一人娘』)

(14) neya 'otoka 'onnyketa 'opompaki naa 'oyaw naa
 その 器の 中に 蛙 やら まむし やら
 kara-teh tani 'ampa-'ani tah tani suke kusu kara
 つくって 今 持ってき-て それを 今 煮 ようと して
 nee sirihi 'an manu (同『ウエネネカイペ物語』)
 いる 様子 だった とさ

このように節と節とを並列的に連合させるための接辞は、ツングース諸語のソロン語では -kči 「～して」と -mi 「～し(ながら)」であり、またエウエンキー語では -ksa 「～して(から)」と -nə 「～し(ながら)」, ウデヘ語では -?asi/-kasi

「～してから」と'-mi(複数形:-mi)「～しながら」,満州語文語では-fi「～して(から)」と-me「～し(ながら)」である。これらのうち-kçiと-ksaと-ʔasi/-kasiは*-gaと*-ti²の,-miと-məiは*-maと*-tiの反映形の組み合わせであり,-meは-miが弱化したものであると考えられる。-nəは*-ga>*-nga>*-ŋa>*-naという変化を経たものにちがいない。一方,満州語文語の-fiはモンゴル語文語の-füに対応するものであろうが,その起源は定かではない。しかし,満州語のたとえばfahùn「肝臓」という語がエウエンキー語のxakin「肝臓」やウイльта語のpaaxa「肝臓」に対応することから,-fiの前身は*-xiか*-piであったと言えるかもしれない。そして*-xiあるいは*-piは,さらに*-kiあるいは*-miに遡るものであると言えるかもしれない。

アイヌ語やツングース諸語に見られるのと同種の接辞がチベット語やビルマ語などにも存在する。ガバイン(1950:165)は古代チュルク語の様態副詞に現れる-ti,-tī,-di,-dīを「アルタイ語的接尾辞」と見なしているが,チベット語文語に見られる-teはまさしく古代チュルク語の-ti,-tī,-di,-dīと同様に*-tiの反映形であり,ナシ語の-nu「～して」やカチン語の-na「～して」の起源は明らかに*-gaと関係がある。ビルマ語の-lóu「～して」も同様に*-gaが*-ya>*-raという変化を経たものであろう。一方,トゥルン語の-ma「～して」は*-maをそのまま受け継いだものであり,ビルマ語の-hma「～してはじめて」は*-gaと*-maの反映形が合わさったものであろう。また口語のtço-ta dzw「煮ながら食べる」におけるような-taは,口語の具格接辞-siやビルマ語の副詞形成辞-tと同様に*-tiの反映形であると考えられる。なお,ハコ語では「～して」という継起の意味を表すのに,「動名詞+具格接辞-ha」という形が用いられる。

以上のように,具格接辞はアジア地域の諸言語において副詞・副詞句・副詞節を形成するための形態,とりわけ様態副詞をつくったり,節と節とを並列的に結びつけるための接辞に発達した。そして二つの節の並列関係を表現するのに,複数の接辞が使い分けられるようになった。ソロン語の-kçiと-miが同じ並列関係を表す標識でありながら,前者が「～して(から)」,後者が「～し(ながら)」を意味するようにである。このような機能分化は日本語にも起こっている。連用形に付属する-teは連用形としての意味をいわば強化するために加えられたもの

² この*-tiは専格接辞であった可能性が高い。

であるのだが、連用形による表現とその後に -te を付加した表現は必ずしも等価ではない。そこで、たとえば「食べ歩く」を「食べて歩く」には換えられないし、「歩いて行く」を「歩き行く」には換えられない。このように等価交換できないのは、連用形表現あるいは -te 形表現と -tutu あるいは -nagara の場合も同じである。-tutu も -nagara も二つの事態が同時的であることを明示するための接辞であるが、-tutu は *-ti の反映形を二つ、-nagara は *-ga の反映形を三つ重ねたものである。³

2 連体形・属格接辞

古代日本語の属格接辞は、動詞・形容詞の連体形接辞を別にすれば、-ga, -nō, -tu である。これらのうち -tu はすでに生産的な接辞ではなくなっており、限られた表現にしか用いられなかった。一方、-ga と -nō は古代語において広く用いられたが、その使用範囲は -ga よりも -nō の方が広がった。-ga もまた、-nō によって駆逐されようとしていたと言っただろう。

(15) 妹^{いも}があたり^わ我が袖^こ振らむ木の間より出で来る月に雲なたなびき

(『万葉集』1085)

(16) 片兵^{むか}のこの^を向つ尾に^{しほ}椎まかば今年^なの夏の^な蔭に並みむか(同 1099)

-ga と -nō の使い分けについて、それが尊卑の区別をするためのものであったという説と、ウチ・ソトの区別をするためのものであったという説がある。これらの説はどちらも的はずれではない。しかし -ga と -nō の間には、たった一つの基準によってその使い分けの実態を確定できるほどの明確な仕切りがあったわけではない。というのも、たとえば「梅が花」と「梅の花」のように -ga と -nō のいずれをも使用できる表現が古代語に多数存在したからである。

ここで論じなければならないのは、-ga と -nō が古代日本語においていかに使い分けられたかという事柄ではなく、-ga と -nō が、そして -tu が属格接辞とし

³ 大野ら(1974:1456)は、-nagaraを連体助詞「な」と名詞「から」との複合と見なしている。あとの稿で触れるように、筆者は、属格接辞の -kara から名詞の「から(柄)」が生まれたと考えている。

ていかに成立したかという問題である。この点に関する筆者の考えは、-ga と -no がまちがいに属格接辞 *-ga を、-tu がおそらく奪格接辞 *-ti を引き継いでいるということである。奪格接辞が属格接辞に転じるのは不自然な変化であると思われるかもしれないが、これは奪格接辞に属格的意味が加わった後に本来の奪格的意味が失われた結果であると考えられる。すなわち、本来は「～から」という意味を表した -tu がたとえば「沖つ波」や「沖つ風」におけるように「～からの」という意味を表すようになり、これが後にたとえば「沖つ島」や「沖つ鳥」におけるように「～の」という意味に変わったのであろう。なお、モンゴル語や満州語では -i が属格接辞であるので、それらの言語においても奪格接辞 *-ti は属格接辞へと拡大したようである。

ところで、属格接辞の起源は動詞・形容詞における連体形の起源と切り離して考えることはできない。というのも、動詞・形容詞の連体形は動詞・形容詞の語幹に属格接辞が付いて成立したものにちがいないからである。古代語における動詞の連体形接辞は、ar-u や sak-u のように -u であるか、su-ru や mi-ru のように -ru であったが、-u の前身は -ru であったろう。そして、-ru は *-yu に、*-yu は *-gu に、*-gu は *-ga に遡るものと見なされる。一方、古代語における形容詞の連体形接辞は「古き都」とか「美しき人」におけるように -ki であったが、その前身は *-ka であり、そのまた前身は *-ga であったと考えられる。*-ka から *-ki への変化は、「美し」や「苦し」のようないわゆるシク活用をする形容詞において語尾の *-sika が一種の母音調和によって -siki になり、これが「古し」や「長し」のようなク活用の形容詞に波及した結果であろう。もっとも、かつてはすべての形容詞がシク活用をし、すべての形容詞の連体形語尾が -sika から -siki に転じたのかもしれない。なお -ki の前身が *-ka であったという推定は、九州の諸方言に「うまか魚」「苦しか思い」のような連体形接辞 -ka が存在することを拠りどころにしている。

ここで日本語以外の言語にも注目し、属格接辞*-gaの反映形が属格接辞として、あるいは動詞・形容詞の連体形接辞としてアジア太平洋諸語に広く流布していることを確認しておきたい。チベット・ビルマ語派のナシ語では、形容詞が非修飾語の前に置かれるとき、xy-ga thophv「赤い布」のように連体形接辞の -ga が用いられる。カチン語には属格接辞としての -a?と所有・所属を表す -na とがあ

るが、これらはともに *-ga の反映形である。ツングース諸語のたとえばウイльта語においても、*-ga の反映形と見なされる -ŋu が ulisa-ŋu-bi (肉-接辞-私) のように「譲渡可能」所有を表す。アイヌ語では *-ga が -un⁴ として受け継がれ、kim-un kamuy 「山の神(すなわち熊)」のように用いられる。また北米インディアン語のハイダ語では、*-ga を継承した -ga が dī gō'n-ga (私-父-接辞) 「私の父」のように用いられるだけでなく、同じ -ga が nā-ga 「私の」、dA'n-ga 「あなたの」、lā-ga 「彼・彼女の」のように所有代名詞の構成要素となる。

以上のように、日本語を含むアジア太平洋諸語の連体形・属格接辞はほとんどすべて *-ga の反映形と見なしうる。この事実は、アジア太平洋諸語が同じ系統の言語群であり、日本語がその一員であることを何よりも雄弁に物語っている。

3 主格・話題化・強意接辞

日本語の主格接辞 -ga は、属格接辞に由来するものであると言われる。すなわち、たとえば「我が見し^わら」という表現において「我^わが」はもともと「子^わら」を修飾する属格であったが、やがてそれが「見し」との間に主述関係を結ぶようになり、主格接辞としての -ga が成立したというのである。なるほど問題の -ga は古代語ではほとんどもっぱら名詞節あるいは条件節の中に現れるので、主格接辞 -ga の属格起源説は説得力にあふれた説明のように思われる。しかし、最古の日本語資料の中に以下のようなれっきとした主格接辞 -ga が見いだされるといふ事実は、属格接辞から主格接辞への変化を認めるにせよ、それが有史前に起こったものであること、したがってそのメカニズムを時系列にそって実証する手立てがないことを意味している。

(17) みつみつし ^{くめ}久米の子^が ^{くぶつ}頭^椎い ^{いしつ}石^椎いもち 撃ちてしまむ
(『古事記』歌謡 10)

さて、主格接辞 -ga は話題化接辞 -wa と歴史的に不可分の関係にある。すな

⁴ -un は節を名詞化する -ne (「私^わが買ったの」と言うときの -no に相当) と同源と思われる。もつとも知里 (1974: 110, 121) は、-un について本来は「はまる」「はまっている」「ついている」という意味の動詞であると述べている。筆者は、-un に動詞らしき用法があるとしても、それは属格接辞から生まれたものであると考える。

わち, 両者の源流は一つである。-wa は古代語では -(ϕ a (上下の唇を近づけて [fa] のように発音する)) であり, - ϕ a は*-ga が*- γ a > *- η a > *-xa という変化を経て成立したものであると推定される。

(18) あらたまの ^{とし きふ}年が来経れば あらたまの ^{きへゆ}月は気経往く
(『古事記』歌謡 28)

古代日本語の話題化接辞 - ϕ a が *-ga の反映形であるというのは、むろん筆者の考えである。 ϕ は古くは *p であったという定説に反してこのように推論するのは、それなりの理由がある。第一に、すべての ϕ が p に遡るということが事実として論証されているわけではない。第二に、*p と *x という異なる音が古代語において ϕ という同一音になったという可能性を退ける根拠は見つからない。そして第三に、これが最大の理由であるのだが、日本語以外の言語に *-ga の反映形と見なされる話題化接辞が存在する。たとえば、カチン語では -ko という形態が、ビルマ語では以下のように -ha (文語では -ka/-ga) という形態が「～は」という意味で用いられる。

(19) ne[?]phyin-ha taning[?]nwei-néi.

あした-話題 日曜-日
「あしたは日曜日だ」

ところで、日本語で対比的意味あるいは「取り立て」の意味を表そうとする場合にしばしば -wa や -ga を用いるが、ビルマ語ではそのような意味を、疑問文では -kô/-gô, 平叙文では -ká/-gá, -kou/-gou, -tó/dó を用いて表す。

(20) c[?]no biya tau[?]-me. khimmyâ-gô.

私 ビール 飲む-叙想法 あなた-対比
「私はビールを飲む。あなたは？」

(21) taning[?]nwei-néi-hma-gou la-me.

日曜-日-対比 来る-叙想法
「日曜日には来るだろう」

上の(19)～(21)に例示した-ha や -gôu は *-ga を継承したものにちがいない

いが、問題は *-ga の反映形がいかにして話題化接辞になったか、あるいは対比的意味を獲得したかである。この点に関して筆者はこう考える。話題化接辞のもととなった *-ga は属格接辞ではなく具格接辞であった。具格接辞が能格接辞となり、能格接辞が主格接辞となり、主格接辞が話題化接辞となったのである。有史前に起こったこの変化の全貌を一つの言語において連続的に捉えることはできないけれども、複数の言語の共時態をつなぎあわせることによってその変化の過程を追跡することは可能である。

まずはじめに、具格接辞が能格接辞になったことは、とりわけチベット・ビルマ語派において明白な事実である。多くの言語において、能格は具格と同形だからである。オーストロネシア語族でも、たとえばサウ語では道具・手段を表す前置詞 *ri* と他動詞文主語の標識 *ri* とが同形である。

次に、能格接辞が主格接辞になったという主張は、たとえばチベット・ビルマ語派のナシ語に *-ga の反映形と見なされる主格接辞 *-nu* が存在することによってその裏付けを得られる。*-nu* は能格接辞から主格接辞に転じたものにちがいない。このことは、ネワール語の *-nāā*、トゥルン語の *-ka*、ハコ語の *-ha* などが能格・具格接辞であること、またナシ語では *-nu* が具格接辞でもあることから判断して明らかである。

このように能格接辞から主格接辞が生まれたとして、では、主格接辞が話題化接辞になったのはなぜだろうか。この疑問には次のように答えたらよからう。主語は話題（トピック）にいちばんなりやすい要素である。その主語を標示する主格接辞は必須の要素ではなかった。そこで、主格接辞が話題化接辞と見なされるようになったのである。筆者の考えでは、古代日本語の話題化接辞 *-pa* もこのようにして成立したものである。この推論が正しければ、日本語の主格接辞 *-ga* の本当の起源は話題化接辞 *-ha* の起源と同じところに求められることになる。

ところで、オーストロネシア語族に属する多数の言語に焦点化と呼ばれる現象がある。これは一般に話題化と同一視されるが、オーストロネシア語族の焦点化現象、すなわち筆者が視点化と呼ぶ現象は話題化とは似て非なるものである。拙論（1999, 2003b）で指摘したように、その本質は注目要求にある。そして、この注目要求をするための形態はトンガ語では *ko*、サモア語では *'o* (?o)、ヤミ語では *o* であるのだが、これらも本来は主語を標示するためのものであり、究極

的には具格接辞の*-gaに遡るものであると考えられる。

さて、注目要求というのは強調に通じる概念である。そして強調と言えば、古代日本語の-ši〔i〕が注目をひく。

- (22) 吾はもよ 女にしあれば 汝を除て 男は無し (『古事記』歌謡3)
 (23) 細螺の い這い 廻り 撃ちてし止まむ (同14)
 (24) 倭は 国のまほろば たたなづく 青垣 山隠れる 倭しうるはし (同30)

ここに例示した-šiの起源は具格接辞*-tiに求めることができる。このことを裏付けるために、少々まわりくどいが、日本語以外の言語の中に*-tiの発達過程をたどり、そこに-šiと類似した形態と機能とを探しだす努力をしてみよう。

-tiの反映形は、具格接辞-gaの反映形とよく似た発展の道をたどった。チベット・ビルマ語派の多数の言語において、*-tiを受け継いだと思われる形態が能格・具格接辞となっている。西(1992:533)が作成したヒマラヤ諸語の格標識対照表によると、たとえばグルン語では-di、タカリ語では-ce〔tʃe〕、タマン語サフ方言では-ce〔tʃe〕/〔tʃe〕、タマン語シャンク方言では-se または-iが能格・具格接辞である。

*-tiの反映形は主格接辞にもなった。たとえば、朝鮮語には主格接辞の-iが存在する。古代日本語にも主格接辞-iがあった。

*-tiの反映形は話題化接辞にもなっている。モンゴル語文語では、-šiが日本語の-waに相当する働きをする。⁵ 同様に、中国の甘肅省の一部地域に居住する東郷族^{ドゥンシャン}によって話されるモンゴル系の東郷語では、ši〔ʃi〕が話題化接辞として「～は」という意味を表す。

- (25) tere ši lauši wo.
 彼 話題 先生 だ
 「彼は先生だ」

東郷語のšiは、このように「AはBだ」「AはBでない」という構文でのみ

⁵ 小沢(1997:287-289)によれば、-cuあるいは-cüという形態も同じ働きをするようである。なお、「取り立て」の意味を明示するには-cigiという形が用いられるが、これは*-čigaが母音調和によって変形したものであると考えられる。

用いられる。したがって、それはもっぱら名詞述語文における主語を話題として提示するという役目を担っている。š*i* は連辞ではないかという考えもあるが、これは単に二つの項を結んでいるだけではない。ところで、東郷語の š*i* は中国語の 是 (是) を借用したものであると言われるので、ここでそれを取りあげるのは場違いと思われるかもしれないが、必ずしもそうではない。なぜなら中国語の 是 も、たとえば我是学生「私は学生だ」におけるように、名詞述語文の主語を話題化することが本来の役割であったと考えられるからである。そして何よりも、中国語の 是 もまた **-ti* の反映形であることを匂わせる言語事実が存在するからである。

この点に関して第一に指摘しなければならないのは、**-ti* の反映形ではないかと思われる格標識が中国語に見いだされることである。「~で」「~を用いて」という意味の -*yǐ* (以) がその一つである。「~の」を意味する -*de* (的) も**-ti* とつながっていそうである。このような介詞、すなわち英語の前置詞に相当する語は動詞に由来するものであると言われる。しかし発想をむしろ逆転させて、中国語の動詞の中には具格接辞を起源とするものがあると考えたほうが適切である。その詳細は、次稿であらためて論じることにする。

中国語の 是 (是) が **-ti* の反映形であるという仮定の傍証となる言語事実はオーストロネシア語族の中にも見つかる。オーストロネシア語族のうち台湾とフィリピンの諸言語には、<表1>に示すような視点標識がある。

<表1> オーストロネシア語族の視点標識

		バイワン語	アミ語	タガログ語
一般名詞	単数	a	ko	ang
	複数	a	ko	ang , mga
人名名詞	単数	ti	či [ti]	si
	複数	tia	ča [tsa]	sina

この表に示された形態のうち今ここで注目すべきは、人名名詞の特に単数形に付される *ti*, *či*, *si* である。これらはオーストロネシア語族にも **-ti* の反映形が存在することを物語るだけでなく、中国語にもその祖語の段階に **-ti* が存在し

たことを示唆している。これら *ti*, *çi*, *si* と中国語の *shì* (氏・士) や *shī* (師・司) との間に歴史的なつながりが認められるからである。*shì* と *shī* は「陳氏」のように人名名詞に付されたり、「老師」のように人間名詞あるいは職業名詞を構成したりする。どうやら具格接辞の **-ti* は、オーストロネシア語族では能格と主格の標識を経て人名名詞の視点標識となったが(チャモロ語では単なる人名標識となっている)、中国語では話題化標識と人間・職業名詞の標識とになったようである。ちなみに、古代チュルク語では **-ti* に由来する *-çi/-çi* が *yad*「雨粒」*yadçi*「雨乞師」のように人間・職業名詞の構成要素となり、トルコ語では *-ci* [*dʒi*] が *sarki*「歌」 *sarkici*「歌手」のように用いられる。モンゴル語でも、*-çi* がトルコ語の *-ci* と同じ働きをする。これらの接辞は、チベット・ビルマ語派におけるたとえばビルマ語の名詞化接辞 *-tu/-du*「～人」、ナシ語の *ci*「人」や口語の *tsho*「人」、また琉球語でウミンチュ「海の人」と言ったりするときの *ttju*(方言によって発音はいろいろと異なる)、北米インディアン語のタケルマ語で動詞語幹に付属して行為者名詞を形成する *-s*, *-sī*¹, *-sā*² と究極的には同じ根源に遡る形態である。さらにこれらの接辞は、朝鮮語における *aboji*「父」の *-ji*、アイヌ語における *ekasi*「祖父」や *huci*「祖母」の *si* [*ji*] や *-ci* [*tʃi*]、古代日本語における *toji*「刀自」⁶ の *-ji* などとも同源である。

話がずいぶんとんでしまったが、ここで筆者が言いたかったことは要するに、**-ti* の反映形である古代日本語の *-si* が **-ga* の反映形である *-pa* と同様に話題化接辞になる素地が十分にあったということである。そして実際、*-si* は日本語において話題化接辞になり、これが強意接辞に変わった。話題は主語であることが多く、主語以外の要素が話題化されると、往々にして強意的な意味が生まれる。この強意的意味は *-si* に付随するものであったが、やがてこの意味を表すことが *-si* の本務となったのである。強意接辞 *-si* はいろいろな助詞と共起したにもかかわらず、それが話題化接辞の *pa* と共起しなかったのは、*-si* がもとは話題化接辞であったからではないかと考えられる。

⁶ 「主婦」とか「女性」といった意味。本来は「戸口の人」を意味した。琉球語に *tuji*「妻」などの形で残っている。なお大野ら(1974:911)はこの語を「トヌシ(戸主)の転」としているが、比較言語学的観点に立てば、このような解釈を受け入れることはできない。

4 名詞化接辞

この節では、名詞化接辞がもともとは具格接辞や所格接辞であったことについて論じる。名詞化接辞に関する従来の研究は、名詞の成り立ちを考察するためのものであった。したがって、名詞化接辞そのものの起源にまで立ちいって論じられることはほとんどなかった。阪倉（1990）は、古代日本語において名詞の構成に盛んな生産力を発揮したという *-ka*, *-ra*, *-sa*, *-ta*, *-ma* の起源を「情態的意味」を表すという *a* 母韻接尾形なるものに求めているけれども、この *a* 母韻接尾形が何から発したものであるかは問題にしていない。

さて *a* 母韻接尾形とは、阪倉が古代日本語の名詞構成法として存在したとして三つの接尾形の一つである。残る二つの接尾形とともに、その具体例を下に示してみよう。

1) *u* 母韻接尾形

はる なつ ひる よる うす きぬ いぬ さる まつ くず
春・夏・昼・夜・白・衣・犬・猿・松・葛など。

2) *a* 母韻接尾形

はら くま つか むら をさ たま なわ あだ ひら さか
原・隈・塚・叢・長・珠・縄・徒・平・逆など。

3) *i* 母韻接尾形

つり ちり いし つち みち いひ もり はやし くち ゆき
釣・埃・石・土・道・飯・森・林・口・雪など。

阪倉によれば、第一の *u* 母韻接尾は時代的にもっとも古く、これは「動詞的概念を自然に表現する形式であると同時に、また名詞的性格をももち得たような、総合的な性格のもの」であったが、「名詞としての概念の鮮明さと、価値的な独立性を求める人びとの気持は、しだいにこうした曖昧さを含む形式を嫌って、より適当な新しい形式を必要とすることになり、こうして生まれてきたのが第二の *a* 母韻接尾方式によって構成される名詞」であった。そして、この *a* 母韻接尾が四段活用動詞の未然形を形成することになったという。一方、*i* 母韻接尾形は万葉時代における最も一般的な名詞構成方式であり、*i* 母韻が古い *u* 母韻接尾形に付加されて *tuku + i > tuki* のようないわゆる乙類イ列音の *i* を生んだり、*a* 母韻接尾形に付加されて *saka + i > sakë* のような乙類エ列音の *ë* を生んだりしたという。

阪倉 (1990) が言わんとすることの骨子は以上のとおりであるが、同じ事柄を比較言語学的観点から見直してみると、いくぶん異なった事実が浮かびあがってくる。阪倉の説は、接尾辞 -ka, -ra, -sa, -ta, -ma の成り立ちに関して根本的な再検討を要する。

-ka: ^{さか}坂・^{つか}塚・^{はか}臺・^{おく}奥か・^{くぬが}陸など。
 -ra: ^{あか}赤ら・^{さか}賢しら・^{つばら}円・^{まくら}枕・^{さくら}桜など。
 -sa: ^あ悪しさ・^{かしこ}畏さ・^{なが}長さ・^{よこ}横さ・^{たて}縦さなど。
 -ta: ^{ひなた}日向・^{かた}肩・^か彼なた・^{へた}畔・^{わた}曲など。
 -ma: ^{はま}浜・^{やま}山・^{はざま}谷・^{ふすま}衾・^{はかま}袴など。

阪倉は -ka, -ra, -sa, -ta, -ma を、a 母韻接尾形に「異分析が施された結果析出されてできた形態素」であると述べているが、この論には二つの問題点がある。一つは、たとえば「^{ふもと}麓」「^{さと}里」「^{やまと}倭」「^{たもと}袂」「^{くど}竈」「^{まど}窓」「^{ふど}井戸」などにおけるような -to や -do が考察の対象から除外されている点である。もう一つは、-to や -do, そして -ka や -ta がもつばら場所的意味を表し、-sa がもつばら抽象的意味を表すことと、これらが「異分析によって析出された形態」であることとの関係が不問に付されている点である。

筆者の見解では、名詞を構成する -ka, -ra, -sa, -ta, -ma は具格接辞や所格接辞の *-ga, *-ti, *-ma に遡る形態である。すなわち、-ka と -ra は *-ga を、-sa と -ta は *-ti を、-ma は *-ma を引き継いでいると考えられる。また私見では、a 母韻接尾と u 母韻接尾の一部は *-ga を、i 母韻接尾の一部は *-ti を継承したものである。

このような仮定を裏付けるために、二つのことを確認しておきたい。まず一つは、具格接辞や所格接辞がどういふふうにして名詞化接辞あるいは名詞構成素になったかについてである。この点に関する私見は以下のとおりである。かつては動詞と名詞とを仕切る形態的差異はなく、動詞をそのまま名詞に転用することができた。動詞はまた、しばしば格標識が付されて、アイヌ語の e-koiki 「～で闘う」、e-horari 「～に住む」のように表された。また、この種の標識は動詞の末尾にも付せられた。そして末尾におかれた格標識は、次稿で論じるように動詞語尾となっていたが、動詞が名詞に転用されたとき、それらの語尾も一緒に名詞に

転じた。正確に言うと、まず最初に名詞化接辞となったのである。こうして本来は格標識であったものが「～こと」「～人」「～道具」「～場所」といった意味の名詞を構成する接辞となったのであるが、一部の形態はさらに、「人」「道具」「場所」などという意味を担う名詞に発達した。このことを示す具体例としては、たとえばフィリピン諸語の一つであるイトバヤトン語において具格接辞 **-ti* の反映形である *i-* を接頭辞とする *i-pangkokoyta* が「道具でタコを捕える」という動詞としての意味と「タコを捕える道具」という名詞としての意味とを兼ねているという事実と、アイヌ語の *kamuy* 「神・獣・生きもの」という語が *kamu* 「おおう・かぶさる」に *-i* (<**-ti*) を付されたものであり、その原義はおそらく「毛をかぶっているもの、すなわち毛物」であったということと、日本語の「車」「衾」「袴」という名詞が本来は「操るための道具」「伏すための家具」「穿くための装束」を意味したという事実をあげれば十分であろうが、さらに蛇足として付け加えれば、「枕」とは「巻きつけるようにして首にからませる寝具」のことであり、「桜」とは「咲く花」のことであった。これら日本語の例はいずれも連体形に名詞としての *-ma* と *-ra* が付いた事例であると思われるが、動詞の語根レベルの形態に接辞が付いた例としては、**ku* 「食う」に *-i* (<**-ti*) を付加した *kë* 「食事」や、同じ **ku* に *-i* (<**-ti*) を付加した *ku či* 「口」や、**a* 「歩く」（古代日本語の「来」、朝鮮語の *gaa-*、満州語の *gə̀nə-* 「行く」、ビルマ語の *la-* 「来る」、ボナベ語の *koh* 「来る・行く」などとおそらく同源）に *-ši* を付加した *aši* 「足」をあげることができる。どうやら、「口」の原義は「食う場所、あるいは食う道具」であり、「足」の原義は「歩く道具」であったようである。

ところで大野ら（1974）は、「袴」は「穿く」の名詞形ハカにマが付いたものであり、「マはモ（裳）の母音交替形か」と述べ、阪倉（1990）は情態的意味を表すハカと「もの」を意味するマとの組み合わせであると説いているが、「車」や「衾」との比較で言えば、「袴」は **ɸkuma* > *ɸakama* > *hakama* という変化を遂げたと考えるほうが理にかなっている。なお *-ma* が非常にしばしば場所を表すことに関連して一言しておく、と、「広場」「山場」などと言うときの「*-ba*（～場）」はおそらく **-ma* > **-mba* > *-ba* という変化を経たものである。このような変化が起こりうるものであることは、たとえば「軒」を「軒」と言

ったり、「^{かむ}冠る」を「^{かぶ}冠る」と言ったりすることからも知られよう。

さて、ここでもう一つ確認しておきたいのは、*-ga, *-ti, *-maの反映形が日本語以外の言語でも名詞化接辞として広範囲に用いられるということである。たとえば、朝鮮語には*-ga, *-ti, *-maと密接に結びついた-gi, -i, -mという名詞化接辞が存在する。また、朝鮮語にはsaram「人」という名詞が存在するが、これは*-tiの反映形sāと*-gaの反映形raと*-maの反映形mとが合体したものであると考えられる。アイヌ語では-hi(<*-ti)が一般的な名詞化接辞であり、これと同源の-iは動詞に接合して「~ところ」「~とき」という意味の名詞を構成する。また、-pe/-pは「~こと」「~もの」という意味の名詞をつくるが、これは*-maが*-mpa>*-paという変化を経て成立したものである可能性が高い。モンゴル語やトルコ語にもこの種の接辞が認められる。小沢(1997:208)によると、モンゴル語文語の-iと-mは古い名詞化接辞であるというが、iは*-tiの、-mは*-maの反映形であろう。トルコ語では-maが動名詞の標識である。また、チベット・ビルマ語派のリス語には*-tiの反映形と見なされる名詞化接辞-suと-duがあり、動詞語幹に付属して-suは「~人」、-duは「~道具」という意味の名詞をつくる。さらにビルマ語では、*-gaに由来する?-が動詞語幹に付属して,lou?「する」 ?-lou「仕事」のように用いられる。

このような名詞化接辞はオーストロネシア語族や北米インディアン諸語にも見られる。たとえばオーストロネシア語族のトンガ語では、具格接辞の*-gaを引き継いだ-(C)anga [(C)an̩a] (Cは子音), -nga[n̩a], -'aʔa], -aという接辞がnofo「住む」 nofo'anga「住居」、mohe「眠る」 mohenga「ベッド」、nofo「座る」 nofo-'a「馬の鞍」のように用いられる。同様に北米インディアン語の一つ、ツィムシアン語でも、同じ*-gaの反映形と見なされるha-が動詞に接辞して、na'kst「結婚する」 ha-na'kst「結婚するための手段、すなわち結婚の贈り物」のように道具や手段を表す名詞の構成要素となる。このように*-ga, *-ti, *-maという同一の源流から発したと思われる形態が遠く離れた諸地域で名詞化接辞としての機能を獲得しているという事実は、それらの言語の同系性を証明する根拠の一つになると同時に、格標識が名詞化接辞のもととなったことを示す動かぬ証拠となる。

名詞化接辞にかかわる問題のしめくりに、諸説紛々の「ク語法」について私

見を述べておきたい。まずはじめに、「ク語法」なるものの何たるかを説明するために、大野ら（1974）から以下の文章をひく。

今日「いわく」「恐らく」などというが、これは、奈良時代にはきわめて活撥に行なわれていた造語法の、化石的な残りである。奈良時代には「有らく」「語らく」「来(く)らく」「為(す)らく」「老ゆらく」「散らく」などがあり、ク語法と呼ばれる。これは前後の意味から、有ルコト、語ルコト、来ルコト、スルコト、年老イルコト、散ルトコロの意味を表わしていたことが分る。従ってクは、コトとかトコロの意味だということは分っている。コトとかトコロとかの意ならば、クは名詞だから、活用語の連体形を承けそうなものであるのに、「有ら」「語ら」などと未然形を承けている。その上、「来(く)ら」「為(す)ら」「老ゆら」などという活用形は他に例がない。そこで、単純にクを名詞としにくくなった。(10~11頁)

このように「クを名詞としにくくなった」として、大野らは「^{あくが}懂る」という古い動詞に注目する。そして、「^{あくが}懂る」とは「居る所を離れて浮かれ出るとか、物事から心が離れてさまようという意味の語である」から、これはアクとカルとの複合語であると見なす。そしてさらに、カルは「^か離る」という動詞であろうから、アクは「^くところ」とか「^くこと」とかいう意味の名詞であると推論する。こうして、たとえば「来」という動詞の場合には、その連体形「来る」にアクが付いた *kuruaku* が、母音の連続を嫌って *kuraku* になったと説いている。

これは非常にあやうい仮説である。なるほど、「^{あくが}懂る」は「^か離る」という動詞を基盤にして形成された語であろう。しかしこのことは、「^{あくが}懂る」がアクとカルとの複合語であるということにはならない。ましてや、アクが「^くところ」「^くこと」という意味を表したことはない。なぜなら、アクは特に意味のない接頭辞のようなものであったかもしれないからである。アクに「^くところ」「^くこと」という意味を表す実例が見つからないのであるから、そのように推論するほうがむしろ自然である。

さて、「^か離る」という動詞は「^あ離る・^あ散る」「^{あか}散る・^{あか}分る」という動詞と同源であるが、これらに共通する意義素を抽出するとすれば、それは「もとの居場所を離れる」ということになる。であれば、「^か刈る・^か借る・^か駆る・^か狩る」という動詞や、「手足の皮が裂けて破れる」「あかぎれがきれる」を意味する「^{かが}皸る」も「^か離る」と同源であると見なされる。さらに、「来る」という意味の「^く来」、^く「引いて寄せる」「^くたぐる」という意味の「^く繰る」、^く「えぐる」という意味の「^く割

る」も一つの根源より生まれた語であると考えられる。

このような想定にもとづいて、問題の動詞形 akugaru (懂^{あくが}る) を , aru (離^ある・散^ある), akaru (散^ある・分^ある), karu (離^かる・刈^かる・借^かる・駆^かる・狩^かる), kagaru (輝^{かが}る), ku (来^く), kuru (繰^くる・割^くる) とのからみあいの中でその成り立ちを追求してみる。これら動詞における語末の -ru は動詞化接辞として付加されたものであるから、それを取り除いた akuga, a, aka, ka, kaga, ku という形態が問題となるのだが、これらに共通する原初的な形態として *ka あるいは *ku という語根を仮定することができるので、結局は akuga, a, aka, kaga の構成を考えたらよい。こうなると、答えはすこぶる簡単である。a は *ka が弱化したものであり、kaga は語根の *ka を二つ重ねた *kaka が変形したものである。そして「懂^{あくが}る」を構成する akuga が、おそらく語根を三つ重ねることによって形成されたものである。とすれば、問題の aku は「ところ」「こと」を意味する語ではないということになる。

「ク語法」に関してこれまで謎とされてきたのは、「有^あら」や「語^{かた}ら」が連体形ではなく未然形であることと、「来^くら」「為^すら」という活用形がそもそも存在しないことであった。つまり、「ク語法」は修飾・被修飾という内部構造をもちながら、修飾部分が修飾語としての体を成していないことが不思議に思われてきたのである。そこで今、発想を転換して、「ク語法」は本当に修飾・被修飾の関係にあったのかという疑問を発してみる。大野らは、上に引用したように、「これ(ク語法)は前後の意味から、有ルコト、来ルコト、スルコト、散ルトコロの意味を表わしていたことが分る。従ってクは、コトとかトコロの意味だということは分っている。コトとかトコロとかの意ならば、クは名詞だから、活用語の連体形を承けそうなものなのに……」と立論する。これは、「ク語法」の解明を試みた諸説に共通する見解である。しかしよく考えてみると、そこには重大な過ちが認められる。「ク語法」の -ku は、辞であって詞ではない。つまり、名詞化接辞であって、名詞ではないのである。したがって、-ku に「こと」「ところ」という意味を付与するのは適切ではないし、それが連体形の修飾を受けそうなものだというのも問題の本質を捉えそこなった発想である。-ku が連体修飾を受けなかったのは、-ku にそういう資格がなかったからである。このことは、たとえば英語の coming 「来ること」という動名詞や teacher 「先生」という名詞を例に

とって説明すれば十分に納得されよう。coming が「来ること」という意味を表すのは、-ing が「こと」という意味を表し、その -ing を com- が修飾しているからではない。同様に、teacher は -er が「人」を意味して teach- が -er を修飾しているから「先生」という意味になるのではあるまい。「ク語法」の -ku も、少なくともク語法が成立した当初は、英語の -ing や -er のような純粋に抽象的な役割を担っていたと考えるべきである。

考察がここまで進めば、「ク語法」の成り立ちは明らかになったも同然である。上述のように -ku が単に抽象的な名詞化接辞であるとするなら、その前に位置する -ra（「^い日はく」の場合には - ϕ a, 「^こ恋ひまく」などにおいては -a, 「^{かな}悲し^{さむ}けく」や「^{さむ}寒けく」においては -ke）もそれと同類であろう。そこで、以下の結論が得られる。「ク語法」の - ϕ aku, - ϕ aku, -aku, -keku は、「^{さむ}爽らか」や「^{はな}髙らか」における -raka, 「^{さわ}爽やか」や「^{はな}華やか」における -yaka と同様に、*-ga の反映形を二つ重ねた名詞化接辞である。これらはもともと動詞や形容詞の語根に付き（たとえば、「^い日はく」「^く来らく」「^{さむ}寒けく」）、続いて語幹ないしは終止形に付くようになり（たとえば、「^こ恋ひまく」「^{うた}告ぐらく」「^い悲しけく」）、最後には「^い日ひしく」「^{うた}歌ひしく」のように -ku を回想の助動詞「き」の連体形「し」に接続して用いるようになった。このように -ku を連体形に接続する用法は、いわば革新的な用法であった。たとえば「^い日はく」というのが語根と接辞とが融合した 1 語のかたまりであるのに対して、「^い日ひしく」は組み立てられた 3 語のつながりである。すなわち、i ϕ i- という動詞連用形に助動詞の連体形 - ϕ i が接続し、そのあとに被修飾語の -ku がおかれている。この -ku は修飾を受けているという意味において名詞であり、それが表す意味は「こと」である。「ク語法」のすべての -ku が名詞化接辞であったのではないということをおきたい。

引用文献

- 大野 晋・佐竹昭広・前田金五郎編(1974)『岩波古語辞典』 岩波書店.
- 小沢重男(1997)『蒙古語文語文法講義』 大学書林.
- ガバイン Gabain A. von(1950), *Alttrkische Grammatik*. Leipzig: Otto Harrassowitz.
- 近藤健二(1999)「能格的なものの発展をめぐって(7)」『言語文化論集』第 XXI 卷第 1 号: 53-67. 名古屋大学言語文化部・国際言語文化研究科.
- (2003a)「具格接辞の変貌とアジア太平洋諸語の系譜(1)」『言語文化論集』第 XXIV 卷第 2 号: 61-76. 名古屋大学言語文化部・国際言語文化研究科.
- (2003b)「具格接辞の変貌とアジア太平洋諸語の系譜(2)」『言語文化論集』第 XXV 卷第 1 号: 31-65. 名古屋大学国際言語文化研究科.
- 阪倉篤義(1990)「古代日本語の内的再考 名詞の構成法を中心に」崎山 理編『日本語の形成』279-304. 三省堂.
- 知里真志保(1974)『知里真志保著作集』第 4 卷. 平凡社.
- 西 義郎(1992)「ヒマラヤ諸語」亀井 孝・河野六郎・千野栄一編著『言語学大辞典』第 3 卷: 505-552. 三省堂.

